

□ 器楽(室内楽を含む)

渡 辺 和

2014年の日本の室内楽シーンで特筆すべきは、5月に開催された大阪国際室内楽コンクールの充実であろう。

大阪いずみホールを舞台に3年毎に開催されるこのイベント、前は3.11大震災と原発事故のため参加辞退団体が続出。震災後の日本で初の国際イベントのひとつとして無事に開催はされたものの、盛り上がり欠けてしまったことは否めまい。

8回目となる今回、毎年開催される第1部門弦楽四重奏と並び、第2部門は前々回来6年ぶりの開催となるピアノ三重奏及び四重奏とされた。そもそも大会主催者が渡航費用を負担するピアノ付き室内合奏の国際コンクールは、世界にも大阪とメルボルンしかない。そのため、参加団体受付締め切り直前に開催されたミュンヘンARDコンクールで涙を吞んだピアノ三重奏団が大阪に殺到。第2部門は世界室内楽コンクール史上稀な、前年のミュンヘン大会以上の高水準の激戦となった。ファイナリストとなった3団体は、どれも過去の大阪大会第2部門に登場すれば十分に優勝し得た実力の持ち主。2011年メルボルン大会で優勝しながらミュンヘンで涙を吞んだトリオ・ラファールが、計算され尽くしたバランスの良さで大阪・メルボルン連覇という偉業を達成する(過去にはトリオ・ジャン・パウルのみ)。第3位のトリオ・アタナソフも、ピアノのアタナソフの個性が多くの聴衆を魅了した。なお、第2位となったノトスケルテットはピアノ四重奏団で、1位とはごく僅差、審査員は大いに悩んだという。

第1部門参加団体の水準も極めて高く、平均的な力は翌月にイタリアのレジオ・エミリアで開催されたボルチアーニ国際弦楽四重奏コンクールよりも上だったろう。優勝のアルカディア・カルテットは前回のロンドン大会に次ぐ連覇で、このところのヨーロッパでの周辺諸国のカルテット演奏水準のかさ上げ傾向を証明する結果となった。両部門ともに、これだけ水準が高いと日本の団体には付け入る隙がない印象を持たざるを得なかったのは、些か残念な事実である。

より重要なのは、OSAKAが世界の室内楽マーケットの中で認知を得つつあることにある。今大会には、世界で最も影響力のあるイギリスの弦楽器専門誌『ストラッド』と、アメリカに残された最後の紙批評メディア『アメリカン・レコード・ガイド』が、大阪に記者を送り込んだ。欧米や韓国から主催者も来阪、インターネットでライブ放送されたセッションは世界中の室内楽関係者に聴かれることとなる。「国際コンクール」を名乗る大会は日本にも複数あり、ジュネーブの国際コンクール連盟に正式加盟する団体は他にもあるが、世界の音楽業界の中で国際大会としてきちんと機能するイベントはこの大阪室内楽コンクールのみだろう。

そもそも数が少ない室内楽コンクールとして、9月に宗次ホールで開催された第2回宗次ホール弦楽四重奏コンクールも注目すべきイベントだった。アマチュア奏者も含めた若い弦楽四重奏にコンクールという形での発表の場を提供する試みは、レベルが高くなり過ぎた国際大会の大阪を補完し、ジャンルの裾野を広げる意味でも重要である。大阪の予選より多い聴衆が詰めかける地域密着ぶりも特筆すべきだ。主催公演の数ばかりが話題になる宗次ホールが、このような教育活動をきちんと続けていることは、大いに評価されるべきである。

コンクールの充実はさておき、室内楽ジャンルそのものの充実が進んでいるかは議論が分かれるところだろう。公共民間ともに主催者の多くが「室内楽は客が入らない」と嘆く状況が、劇的に改善されたわけではない。そんな厳しい状況にあっても、演奏する側の室内楽への関心の高まりを反映し、数だけみれば室内楽演奏会は大盛況である。

2014年に改めて問題として浮上したのは、特定時期の外来演奏団体の集中だった。欧米の演奏会シーズンが終わり夏の音楽祭やセミナーが始まるまでの5月から6月、外来団体の来日ラッシュになるのは他ジャンル同様である。だが2014年は、9月から12月初旬の秋シーズンに20団体を越える外来弦楽四重奏団が公演を行う異常現象が起きてしまった。ほぼ毎週外来カルテットがやって来る中で日本の団体も活動を続けているのだから、首都圏では明らかに供給過剰。11月のコダーイ弦楽四重奏団のように、広島と福岡での公演のみに専念し首都圏や関西圏に近寄らない大物団体すらあった。12月に初来日したコミタスケルテットのように、より多くの聴衆に聴かれるべき団体が地方公演を重ね首都圏主要会場での公演はないアンバランスな状況(上野東京文化会館が改修中だったという特例を考慮しても)を目にするに、業界全体としての何らかの対応の必要を感じざるを得ない。

室内楽の盛況を実感させるのは、むしろフェスティバルである。自治体に音楽事務所や代理店が協力し開催される大規模音楽祭は業界のトレンドとして定着、室内楽が盛んに演奏されている。3月から4月の東京・春・音楽祭、東京有楽町を筆頭に新潟、金沢、びわ湖などで開催され今年5月連休の風物詩となったラ・フォル・ジュルネ、シーズン終わりのセミナー結果発表会でもある6月のサントリーホール・チェンバーミュージック・ガーデン、大阪に秋を告げる大阪クラシック、復興イベントとも重なる秋の仙台クラシックなど、どれも室内楽が公演の多くを占めている。より小規模ながら、行政と民間が共同で開催する木曾福島音楽祭が40回の記念年を迎えたのは、特筆すべきだ。大規模音楽祭とは一線を画した手作り感覚的地方音楽祭は、室内楽や器楽にとって貴重な晴舞台である。

とはいえ器楽・室内楽の単体興行の厳しさに変わりはない。アベノミクス・バブルで再開発が進む都心の新企業本社ビル内に新たに器楽や室内楽公演会場たり得るホールを供えた大手町よみうりホールがオープンする一方で、80年代バブルに誕生し演奏者や主催者から高い支持を得ていた津田ホールは2014年度を以ての廃館が決定した。オープン以来積極的な主催公演を繰り広げてきた東京のJTアートホールと名古屋のしらかわホールが共に主催公演を中止、貸ホールに特化する。近江楽堂、両国門天ホール、ムジカーザ、ソノリウムなど、JTアートホールより小規模で100席クラスのコンサートスペースが室内楽や器楽の演奏会場として好んで選ばれる会場の規模縮小傾向は顕著である。

室内楽の経済的バックグラウンド形成が未熟な日本で、常設弦楽四重奏団を業生に選び、日本初のNPO法人による弦楽四重奏団運営を試みるカルテット・エクセルシオが、結成20年を迎えた。そんな記念の年に、実質上のリーダーたる大友肇が室内楽に専念するチェリストとして初めて齋藤秀雄メモリアル基金賞を獲得したのは、関係者ばかりかこのジャンルを志す若者にも大きな希望を与える朗報となった。また、名曲喫茶荻窪ミニオンを舞台にした東京ベーターヴェンカルテットの定期演奏会が7月に400回を迎えたのも、地味ながら偉業として讃えるべきであろう。

最後に器楽来日演奏家の動向を纏めておく。器楽のジャンルでは、古い時代の音楽が大きな勢力を締める傾向がすっかり定着した。所謂「ソリスト」の国際的スターは出現が難しくなっているとはいえ、一部で熱狂的な支持を得るアリーナ・イブラギモヴァ(5月)、気鋭のヤマニヤ・ラドロヴィチ(10月)、古楽界の俊英アマンティヌス・ベイエ(11月)など、スター候補は次々と日本を訪れる。年末に訪れたゴーティエ・カブソンとユジャ・ワンのデュオは、新時代の黄金コンビになる可能性を感じさせた。何故か日本では余り注目されていなかった日系のアラベラ・美保・シュタインバッハー(12月)にも日の目が当たり始めたのも嬉しい。メルニコフとの充実した二重奏を聴かせたイザベル・ファウスト(6月)、室内楽に新境地を聴かせたレーベン(11月)、プルネロ(11月)、ツェトマイアー(10月)など、今や巨匠となった独奏者の来日公演は、それなりに安定した聴衆を集めた。日本人独奏者では、庄司紗久香の室内楽界の巨匠プレスラーとの共演(4月)は、独奏者としての印象を変えるものであった。